

汲古書院刊

富士川英郎・松下 忠・佐野正巳編

詞華集 日本漢詩

第四卷

詞華集 日本漢詩 第四卷(第三回配本)

昭和五十八年五月 発行

定価八、五〇〇円

編者 富士川 英郎

松 下 野 正 已

佐 松 下 野 正 已

解題 坂 本 健 彦

発行者 モリモト印刷株式会社

印刷 102 東京都千代田区飯田橋二一五―四

電話(三五)九六四 振替東京五二五〇三

發行 汲古書院

102 東京都千代田区飯田橋二一五―四

電話(三五)九六四 振替東京五二五〇三

發行 汲古書院

102 東京都千代田区飯田橋二一五―四

©一九八三

詞華集 日本漢詩 第四卷―第六卷総目次

第四卷 熙朝詩薈(一)

解題 松下忠

本文影印(内閣文庫蔵本)

熙朝詩薈序―卷之三十五

第五卷 熙朝詩薈(二)

卷之三十六―卷之七十五

第六卷 熙朝詩薈(三)

卷之七十六―卷之一百十

続編本文影印(静嘉堂文庫蔵本)

第一集―第四集

佐藤一斎	安積良斎	村上仏山	石川跳蹊	古賀穀堂
広瀬淡窓	草場佩川	乙骨耐軒	松島北渚	佐藤栢堂
野口西里	雪象	植木玉厓	田辺瞻	広瀬
石川 済	石川 澹	広沢文斎	無名氏	佐野東庵
藤井竹外	久貝蓼湾			

解題

松下 忠

第一章 熙朝詩薈解題

きちようしわい 百十巻目録一卷 友野瑗編。熙の正字は熙、熙朝とはよく治った御代の意、ここでは江戸時代をいう。薈は草木の盛んに茂る意であるから、命名の意図は自ら明らかで、江戸時代の詩の総集という意味である。しかし実際は元和から天保の初までの詩人の詩を収めている。ただし現存者の作品は省いている。筆者の概算では、作家の数は千四百六十七名、作品数は一万四千三百十八首に上る。収録の範囲も広く、諸侯、儒者、専門の詩人、方外（僧侶）、閨秀、尼に至っている。閨秀には井上氏・三好氏・内田氏・立花氏・荒木田氏等二十一名を収め、尼は元総・正慶の二名を収めている。

一 諸本

熙朝詩薈百十巻を百十冊に編輯したものが、前田家の尊経閣文庫本であるが、巻七十七を欠き百九冊がある。この全集のテキストは、内閣文庫本で弘化四年序の稿本四十一冊であり、国立国会図書館の鵜軒文庫本も、静嘉堂文庫本も同じである。内閣文庫本は書中には次のような多くの蔵書印が捺され、本書の経歴を示している。

大學 藏書

日本 政府 圖書

淺草文庫

藏書印に関しては、内閣文庫で印刷された説明がある。これによると、大学については、

「昌平坂学問所の藏書は明治元年四月、大総督府の管理にうつり、同年六月昌平学校、翌二年六月大学校、同年十二月さらに大学の所管に改められた。この大学校や大学は文部省の前身であって、昌平学校のほか、医学校、開成所の二校をも管掌した。明治四年七月にいたり大学を廃して、はじめて文部省を設置した。」

「大學校圖書之印」「大學藏書」の二大朱印は主として右のように明治二―四年の間に押したものであって、新収書のほか、昌平黌や紅葉山文庫伝来の本にもかなり多数押している。毎冊首上部中央に押している。前者の印あるもの漢籍七百四十部、国書三十三部、後者は漢籍七百八部、国書五十部である。」

その他「淺草文庫」「太政官文庫」「内閣文庫」「日本政府圖書」の藏書印が捺してある。内閣文庫で印刷された説明によると、淺草文庫は、

「明治七年七月、政府は地方官會議の議場にあてゐるため、右の書籍館の藏書を淺草八番堀の旧米倉跡に移して、ここに官立の公開図書館淺草文庫を開設し、翌八年十一月から閲覧業務を開始したが、同十四年五月にこれを閉鎖した。当時の藏書数約十四万冊といわれる。」

この「淺草文庫」印は、この期間に同文庫において藏書に押したもので、その大部分が内務省所管を経て当文庫に引き継がれている。銅印で、三条実美の筆と伝え、東京国立博物館に現存している。

和漢書とも各冊首右下部の余白にいていに押してあるほか、まれに洋書にも見かけることがある。紅葉山文庫旧蔵本にもこの印を押したものがあはるのは、修史の資料として早くから昌平坂學問所に移管されていた本であらう。明治十一年刊「博物館書目」や、同十三年刊「博物館書目解題略」は浅草文庫の蔵書内容を示すもので、当時、内務省の博物館という部局に所屬していたのでこの書名がある。」

太政官文庫・内閣文庫は

「太政官文庫は、官庁中央図書館として明治十七年一月設立され、諸官庁の蔵書をいっさい収集、管理してその一元的運用をはかることとなつた。明治十七年皇居（赤坂離宮）内に書庫や事務所を新築し、同二十四年ごろまでの間に多数の和漢洋書が各省からこの文庫に移管された。

その当時使用した蔵書印「**太政官文庫**」にこの二種がある。二行印が多く、一行印は押した本が少ない。文庫創立当初、諸官庁から移管を受けた図書はきわめて大量であつたから、諸官庁に出張してこれに押印するために「太政官文庫」印を増彫した件が文庫日記明治十八年十一月の条に見える。それが一行印であらうか。しかし同年十二月内閣制度の発足に伴い、内閣文庫と改称し、翌年二月から「日本政府図書」印をその蔵書印として新彫したから、「太政官文庫」印を使用した期間は比較的短い。太政官文庫が内閣文庫と改称され翌十九年二月、著名な篆刻家中井敬所（名は兼之）に命じてこの「**日本政府圖書**」印を新たに彫刻せしめた。従来の「太政官文庫」や「秘閣図書之章」に代えて、それ以後昭和七年までこれを使用した。この銅印の現品は今も当文庫に保存されている。

この印文は、蔵書印としてばく然としてゐるようであるが、諸官庁の蔵書を集中管理する中央図書館として創立された当文庫の蔵書印としては、まことに適切な印文であつて、よく当文庫の立場や性格を表現するものと云ふべきであらう。当時、内閣文庫の蔵書印を新彫するに当たり、「大日本帝国政府文庫」「日本帝国図書印章」「日本政府文庫」「日本国政府文庫印」「日本政府図書」の五種の案があつたが、結局、最後のものが採用されたのである。

昭和八年以後は図示の「内閣文庫」を用い、現在もこれを覆刻した印を使用している。」

内閣文庫本をテキストとして採用した最大の理由は、「錦天山房」と版心に印刷された用紙が用いられていることのほか、前述の経歴が重視されたからである。

二 内容の構成

「熙朝詩薈序」に始まり、次に「凡例」、次に「熙朝詩薈總目」、次に「本文」となる。

序文は、最も要領よく纏められた「日本漢文学史」であることは、段落に区切ってみるとよくわかる。即ち

第一大段 詩の定義を明示し、詩の効用について述べる。

第二大段 詩道は政治と共に升降することについて述べる。

第三大段 日本漢詩文の変遷と盛衰について述べる。

第一小段 我が国の文運の始まり。

第二小段 五言詩の始まりとその隆盛。

第三小段 文運の衰微。

第四小段 平安時代文学の盛衰。

第四大段 江戸時代詩文の変遷について述べる。

第一小段 家康の治国の方針と、林羅山の登用と、経学・詩文の士が輩出したこと。

第二小段 元禄・享保期は江戸時代の最盛期で、木門・護社が中心となり、盛唐詩を鼓吹したが、模擬鯁釘の病を
を生じた。

第三小段 江戸時代の詩風は三変した。

第五大段 本書の成立と編纂の目的意図について述べる。

第一小段 江戸時代の詩は前古に過ぎ、斐然として章を成すものである。

第二小段 江戸時代二百余年間の詩を網羅する鉅典が無い。

第三小段 右のような鉅典編綴の志を抱きながら、因循して果さなかった。

第四小段 編纂を事とするに至った動機。

第五小段 本書完成までの経過と苦心。

第六大段 本書編纂の目的と性格について述べる。

第四大段以下、即ち「天悔」禍延篤生」より以下は、最も要領よく纏められた「江戸時代日本漢文学史」としても注目すべきである。

三 編纂の目的意図と凡例

序文の第五大段と第六大段は編纂の目的意図に言及してはいるが、十二箇条より成る凡例が、本書編輯の目的意図を明示している。その中でも主要なものを列举すると、

一、天子・將軍・公卿の作品は、草茅の微臣の敢て議する所ではないので採録しない。（第一条）

一、採録の範囲は、上は元和より下は天保の初までとし、現存者のものは収めない。（第二条）

一、作者の次序は、大率時代の前後年齒の長幼を以てしたが、譜第を以てしたものや、門派を以てしたものや、氣類を以てしたものがある。林氏の子孫は林羅山の後に附記し（巻五―巻十。括弧内は筆者の註、以下同じ）、木門の支流は木下順庵の下に附記し（巻二十九）、護社の支流は荻生徂徠の下に附記し（巻四十）、諸藩の諸侯はそれを一編に

まとめている。（巻二・巻三）（第三条）

一、前賢を表章して湮滅を致さざるを主とする。故に採る所は寧ろ寛で嚴ではなく、後賢の裁定を期待する。(第六条)

一、全篇を採用するに足らぬものでも、一聯でも警策が有れば、摘句として採録した。(第七条)

一、肥後藩の樂津集や、伊勢の国の絃歌餘響や、紀州の南紀風雅集のように、一州一藩に限ることがなく、又歴朝詩纂や日本詩選等のように、広汎に過ぎて詳略を異にすることがないようにした。(第十二条)

凡例十二条の中には、従前の選本に対する嚴しい批判がある。第十一条に曰く、

従前の選本は取る所一ならず。或は格調を取り、或は神韻を宗とし、或は性靈を尙び、各々偏見に據りて前賢を去取す。未だ削趾適屨之弊を免れず云云。

と。かの明清の三詩説を引用している点にも注目すべきであろう。

さて静嘉堂本は内閣文庫本と同じで十二箇条より成るが、尊経閣本は九箇条より成っている。内閣文庫本と比較すると、内閣文庫の第四・第五が尊経閣文庫の第四、内閣の第八・第九が尊経閣の第七、内閣の第十・第十一が尊経閣の第八、内閣の第十二が尊経閣の第九である。

本書の編綴について、霞舟は早くから志してはいたが、家は貧しく、蔵書は極めて少く、費用も亦多いので因循していたと告白している。しかし機会は訪れた。即ち昌平黌の儒員に拔擢されたのである。大学頭林銑(号櫟宇)の懇憑があり、更に費用まで支給してくれることになったので、講義の余暇には編纂の事に専念するに至った。即ち昌平黌の蔵書と家蔵の書に、都内の商店からの購入書を加えたほか、反故紙や散逸書等の残篇に至るまで、広く搜し求め、必要箇所を抜書きすることに全力をふりしぼったという。

書物の体裁をどうするかについては、清の朱彝尊(号竹垞)編輯の「明詩綜」一百卷や、清の王昶(号石湖)撰の「湖海詩傳」四十六卷の例に倣って、名氏の下に小伝を繋げ、附するに詩話を以てしたと云っている(熙朝詩薈序)。

参考までに作品数を作家数で割ってみると、平均九・七首となる。平均の二倍余にあたる二十首以上採録された作家と作品数を調査し、採録数の多い順に並べてみると、次の通りになる。

一八〇首以上採録された者が十一人

1 釈慈周 卷一百七・一百八の二卷にわたって三二三首。

2 石川凹 卷十一に二六六首。

3 菅晋帥 卷八十八・八十九の二卷にわたって二五四首。

4 浅野長泰 卷九十四に二四九首。

5 室直清 卷三十一に二一四首。

6 服部元喬 卷四十二に二〇六首。

7 日政(註元政) 卷一百二に一九七首。

8 藪愨 卷六十一に一九四首。

9 祇園瑜 卷三十四に一九〇首。

10 梁田邦美 卷三十六に一八七首。

11 新井白石 卷三十に一八二首。

一七〇首以上が二人以下巻数・氏名の下に採録された作品の数を算用数字で示す。

12 卷五十三 鳥山寛 179 13 卷七十四 龍公美 173

一五〇首以上が二人

14 卷六 林恕 164 15 卷七 林靖 153

一四〇首以上が五人

16 卷二十六 伊藤長胤 146
17 卷一百六 顯常 145
18 卷五十七 安脩 141
19 卷六十 秋山儀 140
20 卷八十
五 頼襄 140

一三〇首以上が四人

21 卷九 林恣 138
22 卷六十七 上桒美啓 137
23 卷五十九 陰山雍 136
24 卷二十九 木下貞幹 133

一二〇首以上が二人

25 卷五 林忠 129
26 卷十三 菊池東勻 128

一一〇首以上が二人

27 卷九十一 脇長之 112
28 卷六十九 伊藤縉 110

一〇〇首以上が

29 卷八 林慤 105
30 卷四十 物茂卿 103
31 卷六十六 山田君豹 102

九〇首以上が三人

32 卷八十七 市河世寧 95
33 卷三十五 雨森東 94
34 卷八十一 尾藤孝肇 92

八〇首以上が八人

35 卷五十一 宇鼎 87
36 卷五十八 繩維直 87
37 卷三十七 桂山義樹 84
38 卷八十四 頼惟柔 84
39 卷

四十四 高維馨 83
40 卷六十八 小栗元愷 83
41 卷六十八 福世謙 81
42 卷五十九 山梨治憲 80

七〇首以上が十一人

43 卷八 林懋 79
44 卷二十一 笠原龍鱗 79
45 卷一百三 元皓 77
46 卷五十四 益田助 75
47 卷八十

柴邦彦 75
48 卷一百三 原資 73
49 卷八十六 榎田命真 72
50 卷二十五 伊藤維楨 71
51 卷六十九 清

絢 71
52 卷十七 安東守経 70
53 卷一百九 海雲 70

六〇首以上が八人

54 卷二十二 寺田革 66 55 卷六十八 香山彰 66 56 卷二 源興文 63 57 卷四十九 近藤篤 62 58 卷五十

五 東亀年 62 59 卷四十四 谷友信 61 60 卷五十 富逸 60 61 卷七十八 紀徳民 60

五〇首以上が十二人

62 卷一百四 実巖 59 63 卷九 林憲 58 64 卷四十三 服元雄 58 65 卷四十一 越智正珪 56 66 卷四十五

石正猗 56 67 卷四十八 田長温 55 68 卷五十四 江兼通 55 69 卷五十二 三浦晋 52 70 卷九十 石作貞

52 71 卷六十九 清勲 51 72 卷八十二 西山正 51 73 卷十四 宇都宮三近 50

四〇首以上が二十一人

74 卷十 林懲 45 75 卷五十 余承祐 45 76 卷六十六 岡長祐 45 77 卷九十四 香川弘 45 78 卷三 藤原

忠恕 44 79 卷八十一 古賀樸 44 80 卷九十 佐々木俊信 44 81 卷二十二 余澄 43 82 卷四十一 山県孝

孺 43 83 卷五十八 川治義豹 43 84 卷一百 赤田義 43 85 卷二 藤原忠統 42 86 卷五十二 高彝 42

87 卷七十八 南宮岳 42 88 卷五十三 鳥山輔門 41 89 卷六十九 江村綬 41 90 卷九十 山村良由 41 91

卷一百九 元明 41 92 卷 四那波觚 40 93 卷五十六 武龍 40 94 卷七十九 赤松鴻 40

三〇首以上が十九人

95 卷十七 安東守約 39 96 卷三十五 松浦儀 38 97 卷四十一 太宰純 38 98 卷二十三 森尚謙 37 99 卷

三十三 南部景衡 37 100 卷五十五 岳融 37 101 卷七十五 合離 37 102 卷九十 中島漁 37 103 卷二 源定

賢 36 104 卷四十八 山根清 35 105 卷四十八 和知棣卿 35 106 卷五十二 沢村維顯 34 107 卷五十五 野木

公台 34 108 卷七十九 中井積善 34 109 卷六十五 原偉文 33 110 卷四十五 鶴孟一 32 111 卷九十四 岡部正

懋 32 112 卷一百九 志岸 32 113 卷四十六 岡井孝先 31

二〇首以上が三十九人

114 卷六十五	白木彰 29	115 卷七十三	北山彰 29	116 卷二	藤原乗祐 28	117 卷二十二	大高坂季明 28	118
卷三十二	高維明 28	119 卷四十九	湯浅元禎 28	120 卷五十二	星野龍 28	121 卷一	源光圀 27	122 卷十二
賀璋 27	123 卷二十七	北村可昌 27	124 卷五十六	源義質 27	125 卷一	源勝当 26	126 卷十二	人見壹 26
127 卷七十	天爵 26	128 卷八十九	菅晋宝 26	129 卷一百五	法 26	130 卷十二	佐藤筠 25	131 卷十六
下元高 25	132 卷四十六	千葉玄之 25	133 卷七十九	井通熙 25	134 卷十八	伊藤宗恕 24	135 卷二	源重賢
23	136 卷三十二	服部保庸 23	137 卷三十七	橘雍 23	138 卷五十六	五味国鼎 23	139 卷七十五	鳥山宗成
23	140 卷十八	江村宗珉 22	141 卷四十一	安藤煥図 22	142 卷四十一	平玄中 22	143 卷七十五	孔文雄 22
144 卷七十九	伊藤一元 22	145 卷一百九	敬雄 22	146 卷六十二	米田著 21	147 卷二	源伊信 20	148 卷十
林志 20	149 卷十五	陳元贊 20	150 卷七十三	岡崎信好 20	151 卷七十五	芥煥 20	152 卷八十六	鈴木恭 20

以上煩を厭わず一五二名を挙げたが、それでも全体数の一〇、三％で一割強にすぎない。このように少数であればあるほど、選択に当つては一方に偏らない公正さが要求される。然らば霞舟の選択の態度は公正であるかどうかを問題にする必要がある。私はこの点では問題はないものと見る。最も多くの詩を採録された第一級の人々は、極めて少数であるが、その選択は各派に及んで、木門あり、護社あり、林家の門人ありということで、問題はないと思う。その理由は釈慈周即ち六如上人は、初めは古文辞を主張したが、後には古文辞より脱化して袁宏道の性霊説を撰取した人物、石川丈山は専門詩家の先駆で、盛唐詩を鼓吹し、李杜を尊重した人物、菅茶山は宋詩の鼓吹者、明詩の理解者であり、室直清は木門の逸材で、反古文辞の説を唱えた人物、服部元喬は護園学派の逸材で、徂徠の門下では、詩文を以て経学の太宰春台と並び称せられた人物、日政は即ち元政上人で、道德詩文一致論を唱え、性霊説を主張した人物、藪慤は程朱学派で樂泮集十卷五冊の編者であり、祇園瑜は室直清と同じく木門の出身で、詩人としても詩論家としても、

日本近世詩壇に於ける第一流の人物であり、梁田邦美は山崎闇斎の学を好み、詩を以て一世に鳴った人物である。このように一八〇首以上の詩を採録された作家は僅か十一人ではあるが、木門あり、護社あり、崎門あり、儒者あり、僧侶あり、霞舟の態度は一党一派に偏らないものと、評価してよいと思う。

尊経閣文庫には「熙朝詩薈諸家傳抄」全十一冊がある。これは書名が示すように、熙朝詩薈全巻の小伝を集めたもので、各冊の収めているものは、次の通りである。

第一冊	十一至	第二冊	十一至	第三冊	十八至	第四冊	二十七至	第五冊	三十七至	第六冊	四十七至
第七冊	五十七至	第八冊	六十七至	第九冊	七十七至	第十冊	八十八至	第十一冊	一百一十至		
	六十六		七十六		八十七		九十九		一百一十		

本文の体裁が最も整っている一例として、巻四藤原肅を示すと次のようになっている。

- 1 氏名
- 2 小伝
- 3 林忠羅山曰、……
- 4 堀正意敬夫曰、……
- 5 林信澄東舟曰、……
- 6 江村綬君錫曰、……
- 7 原善公道曰、……
- 8 錦天山房詩話、……
- 9 作品例
- 10 以下摘句

しかし、詩人によっては諸家の詩話は一語もなく、錦天山房詩話のみのものもあるし、詩人によってはこれも省いている。池田蘆洲編の日本詩話叢書全十巻は、活用し易く便利なものであるが、第八巻と第九巻に錦天山房詩話のみを収めている。

第二章 熙朝詩薈続編解題

内閣文庫にも、書陵部にも、国会図書館にもないので、静嘉堂文庫本四集四冊によって論述する。前記正編（仮称）のほかに、続編編輯の意図があったことは、正編の凡例の最後の条に見える。曰く（原漢文）

然れども、耳目の及ばざる所、遺漏猶多し。嗣後獲る所有りと雖も、既に更定し難く、又補例無し。續集を編むを俟って、以て完璧と成さんと明言している。

と明言している。

しかし、続編は恐らく未定稿のものであろう。その理由として、筆者は次のように考察する。

一、第一集には、正編と同様、巻数・作者名・作品数が記載されている。

熙朝詩薈卷之一 第一集

(例) 佐藤坦四十五首（以下45と記す）

安積信三十一首（以下31と記す）

但し第二集以下には巻数の記載がない。

二、第三集所収の作家七名のうち「廣瀬」という人物は、草場韓に次いで最も多数の詩が収められていながら、姓

のみが記されていて、名も字も号も記されていない。

三、第四集の無名氏は、七律を主として九首も採録されているながら、名も字も号も記載されていない。

四、生卒不詳の人物が多い。

左に続編四冊の作者名・字・号（最も通用しているものの一つ）・生卒年（西紀による）・作品数（算用数字による）を調査整理し、一覧表にして示すと、

集二第			集 一 第							
合 計	乙 骨	草 場	広 瀬	合 計	古 賀	石 川 (一般久徴)	村 上	安 積	佐 藤	作 者 名
	完	韓	健		燾	澁	剛	信	坦	字
	栗 甫	棣 芳	子 基		溥 卿	伯 誠	大 有	思 順	大 道	号
	耐 軒	佩 川	淡 窓		穀 常	桃 蹊 齋	仏 山	良 齋	一 齋	
作品数 二百七十六首	一八〇六 一八五九	一七八七 一八六七	一七八二 一八五六	作品数 二百三十六首	一七七八 一八三六	一七五六 一八三七	一八一〇 一八七九	一七九〇 一八六〇	一七七二 一八五九	生 卒 年
	75	116	85		49	42	69	31	45	作 品 数